



新 部 門 長 に 着 任 し て

平成20年度FD推進部門長 大矢 勝



本年度より学部におけるFD研修・研究等が義務化されましたが、そのタイミングで重要な役割を担うことに重責を感じております。早速、大学セミナーハウスFD研究会や国立大学教養教育実施組織会議等に参加させて頂き、FD推進部として取り組むべき課題について学ばせて頂いております。それらの経験から本年度、取り組む本学のFDのいくつかの課題について述べたいと思います。

まずFD研修についてですが、その中身はFDについての認識を広める研修、IT活用等の個別の教育方法改善のための研修、FDリーダーを育成する研修、問題を抱える授業に対応する研修等、様々な段階があります。本学では主としてFDの認識を広める研修が行われてきましたが、今後は他の段階のFD研修を充実させることが重要になってきます。たとえば情報基盤センター等と連携し、新たな教育方法を取り入れやすくするFD研修を開催することが求められます。

続いて学生授業評価アンケートについてです。本学の授業評価アンケートは各授業の担当教員に戻し、

目 次

1. 新部門長に着任して
2. 平成20年度初任教員研修会報告
3. 各部局における活動
 - (1) 経済学部FD活動報告
 - (2) 工学部知能物理工学科のキャリア教育
 - (3) 留学生センターFD研修会を開催
 - (4) 英語教育部主催「2007年度 英語実習科目 担当者の集い」報告
4. 第1回大学セミナーハウスFD研究会報告
5. 開催予告「FD合宿研修会」
6. お知らせ

個人単位でのFDに反映させるという体制が進められてきました。しかし、他大学の取り組みと比較すると、本学でのアンケート活用は十分とは言い難いことが理解できました。学生の評価が高い授業、低い授業はどのような授業なのかを、FD担当者が把握できていない場合もあり、改善の余地があります。

学生による評価が必ずしも的を射ているとは限りません。教員を感情的に批判する学生からのコメント等もあり、取り扱いには厳重な注意が必要です。この点をうまく工夫して組織的にアンケートを授業改善に役立てる必要があります。

そういった観点から他大学のFDへの取り組みを見渡すと、FDのリーダーたる教員がどれほどいるのかという点が、大学でのFDの競争力の原点だと感じます。学生授業評価アンケートを組織的FDに取り組む場合も、基本的には個人対個人での相談体制が求められます。その相談業務を担える教員を育成することこそが本学のFDに関する競争力を高めるための最重要課題だと感じています。

以上のような種々の観点から、本年度のFD推進部の取り組みを進めていきたいと考えております。

どうぞご理解・ご協力のほどお願い申し上げます。

平成20年度初任教員研修会報告

FD推進部会 研修・シンポジウムWG



平成20年4月1日(火) 13:00~16:30 教育文化ホール中会議室等で、大学教育総合センターFD推進部が主催する平成20年度横浜国立大学初任教員研修会が開催された。この研修会は横浜国立大学の教育理念・教育目標などを踏まえて、魅力ある授業を行うための教育改善に取り組むと共に、初任教員が部局を越えて本学への帰属意識を持つきっかけになることを目的としたものであり、平成19年4月3日より平成20年4月1日までに採用された教員及び平成18年4月4日より平成19年4月2日までに採用された教員のうち平成19年度初任者研修会に出席していない教員である。平成20年度のプログラムを以下に示す。

第一部

- 13:00~13:10 はじめの挨拶 (飯田嘉宏学長)
- 13:10~13:25 大学教育センター長の話
(鈴木邦雄大学教育総合センター長)
- 13:25~13:35 FD推進部門長の話
(大矢勝FD推進部門長)
- 13:35~13:55 情報セキュリティについて
(長谷部勇一情報基盤センター長)

- 14:00~15:00 就業規則・セクハラ対策等について
(大堀岳満人事・労務課長)

第二部

- 15:00~16:30 各部局に分かれての研修プログラム

まず飯田嘉宏学長による挨拶の中で、歴史の中での横浜の特徴と横浜国立大学の「自由で自律ある学風」について説明された。そして横浜国大の現状と横浜国立大学が今後目指す方向性・展望について、資料①「横浜国立大学の目標と目標達成のための指針」、資料②日本学生支援機構編「大学と学生」平成18年第32号の巻頭言「教育改革を行う理由を改めて考える」をもとに、「実践」の意義、大学での教育改革の必要性、教育の理念と目標について説明がなされた。



続いて鈴木邦雄大学教育総合センター長により、以下の内容についての説明がなされた。

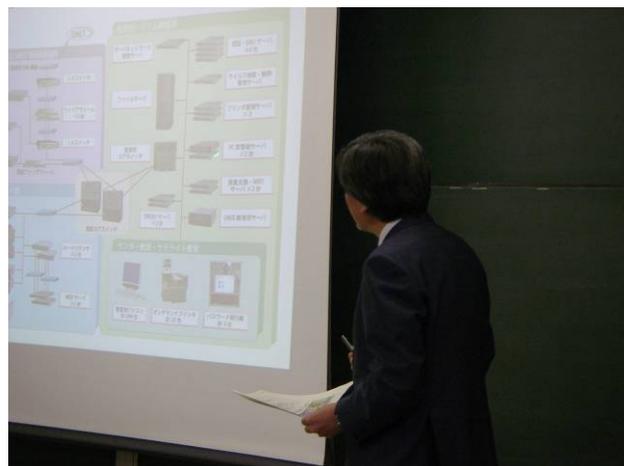
1. 大学に求められる変革：設置基準の改正・シラバスの重要性・本学学生に求められる5つのキースキル、
2. 構成員に求められる改革：学生の開発・教員の開発・職員の開発、

- 3. 横浜国立大学における教育活動の紹介、
- 4. 横浜国立大学の目標と目標達成のための指針、魅力ある教育の推進、学生の主体性を生かした活動の展開、地域連携・産官学連携、国際的な活動の展開。



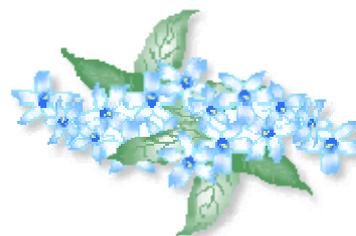
引き続き大矢勝FD推進部部門長より、横浜国立大学のFD活動についての説明がなされた。具体的には、FD推進部とは何か、FD推進部の活動紹介、授業評価アンケート、FDニュースレター、FD Web サイトの紹介がなされた。続いて、情報基盤センターの長谷部勇一センター長より、情報セキュリティについて、横浜国立大学の情報システムの概要・教員への利用環境、セキュリティインシデント

例、本学のセキュリティーポリシー、情報システム運用基本規則等の説明があった。



総務部人事の大堀岳満労務課長より法人化後の人事制度ほかについての研修が行われた。主な内容は就業規則関係、教員の勤務時間、給与体系、人権侵害防止対策（ビデオを利用して）などである。その後各部局に分かれて個別の第二部研修会が行われた。

(奥野)



各 部 局 に お け る 活 動

(1) 経済学部FD活動報告

国際社会科学研究科
 国際社会科学研究科
 国際社会科学研究科
 経済学部

植村博恭
 村上 衛
 Craig Parsons (クレッグ・パーソンズ)
 Steve Hoffman (スティーブ・ホフマン)

① 経済学部（国際社会科学研究科経済系）授業改善セミナー

経済学では、本年からの新しい試みとして、「経済学部（国際社会科学研究科経済系）授業改善セミナー」を開催した。これは、原則として、経済学部の教員全員が参加し、授業内容の質の向上と授業方法

の改善を目指して、積極的な議論を行うものとして企画されている。

内容は、以下のとおりであり、経済学部のほぼ全員の教員が参加し、2時間程度のセミナーが行われた。特に、各専門分野から代表者が出て、それぞれの分野の実情や抱える問題について立ち入った説明

がなされたことは、とても有意義であった。

=====

1. 日時 1月17日(木) 1時から2時間程度

2. 場所 経済学部新棟6階 大会議室

3. 内容

司会：植村博恭 (FD委員会)

- (1) 秋山太郎経済学部長 挨拶
- (2) 教育GPなどの状況について・・・大門正克 (改組委員会)
- (3) 教務委員会からの提言・・・石山幸彦 (教務委員会)
- (4) 昨年度授業評価アンケートの結果・・・植村博恭 (FD委員会)
- (5) 各専門分野からの提言－授業内容・授業方法の改善点
 - ・経済原論・経済システム分野・・・土井日出夫
 - ・ミクロ経済学・マクロ経済学分野・・・秋山太郎
 - ・経済政策分野・・・・・・・・・・萩原伸次郎
 - ・応用経済学分野・・・・・・・・・・奥村綱雄
 - ・計量経済学・統計学分野・・・・・・・・小林正人
 - ・経済史分野・・・・・・・・・・邊英治
 - ・英語プログラム・・・有江大介 (国際交流委員会)
 - ・論文作成指導・・・・・・・・・・有江大介
- (6) カリキュラム・教育内容に関する今後の課題
 - ・・・・・・・・小林正人 (入試・カリ検討委員会)



=====

セミナーにおける討論の結果、経済学部における授業改善に関して、次のような点が確認された。

1) 「授業評価アンケート」の経済学部における結果を検討した結果、経済学部の授業を受講している学生が、予習や復習などを十分に行っていない様子がみてとれるので、この点を至急改善する必要があることが確認された。そのためには、授業内容の一層の体系化をはかるとともに、学生の学習意欲を向上させる必要となろう。具体的には、シラバスの整備、関連科目間での講義内容の連携、定期的な宿題、双方向型授業の導入、卒業論文指導の充実などが考えられる。

2) 現在、教務委員会で行っていることとして、取得単位数の極端に少ない学生への面接があるが、これを一層充実させ、学生の積極的な授業参加を促す必要性が確認された。特に、1年次において大学に来なくなる学生がみられるので、就学指導や生活指導などを含め、1年次の学生に対してきめの細かい組織的指導が必要となっている。

3) 経済学は、分野によってはかなり高度な数学的知識が必要となるので、経済学の授業と数学の授業の連携が必要であることが再確認された。経済学を学ぶために最低限必要な数学の知識を、学生にしっかりと身につけさせることは、経済学の教育の質的向上のために、是非必要なことである。

4) 国際社会科学研究所経済系では、世界銀行等の支援のもとに独自の「英語による修士課程プログラム (Master Program in English)」をもっており、英語に堪能な留学生を数多く受け入れている。このような留学生と日本人学生とが交流する機会を組織し、日本人学生の英語力の向上と国際感覚の育成に努める必要性が確認された。そのために、英語による講義や英語によるコミュニケーションスキル向上のための指導を積極的に発展させることによって、国際性豊かで高度な教育が実現するように、一層の努力を行うことが必要となっている。

5) 経済学部において、授業内容の体系化をはかり、卒業生の学力や総合的能力について質的向上に努めるが緊急の課題であることが、確認された。したがって、次年度以降において、各種の競争的資金などを積極的に獲得しつつ、経済学部の教育の質の向上

に、経済学部全体が組織的に取り組むことが、まさに必要となっている。

② 経済学部の講義紹介

経済学部においては、専門科目においても、国際化に対応した講義の展開が進められている。今回のニュースレターでは、その中から平成18年度ベストティーチャー賞を受賞されたパーソンズ准教授と、特色ある特殊講義「英語によるアカデミックコミュニケーション」を行っているホフマン講師にそれぞれ講義の内容や方法を紹介していただいた。

フィードバックの重要性（パーソンズ准教授）

本年、ベストティーチャー賞をいただき、とても名誉に思うと同時に驚いております。なぜなら、経済学部には他に多くの優れた先生方がいらっしゃるからです。私の講義のスタイルは、本学部の他の教員とさほど違わないと思います。ただ、幾分「アメリカ流」で、通常の日本の講義よりも、学部と大学院の両方で、一学期間に比較的多くのテストと成績に反映する宿題を課しているかもしれません。正直なところ、これは学期を通じて学生と私の作業量を増やしますが、学習プロセスにおいて重要な部分だと思います。とりわけ、経済学においては、概念・モデル・グラフを正確に理解するために、一人机に向かい問題を解くことは重要です。それによって学生の能力向上に関して必要なフィードバックを得ますし、そうすることによって彼等の理解の欠落を補い、彼等が見落としたと思われるポイントを再度強調することができるのです。

概して私の講義のスタイルは標準的ですが、学部の国際関係論の講義では、出来る限りバイリンガルな講義を試みている点は異なっているでしょう。つまり、講義ノートの大部分は日本語と英語の両方で書かれていて、ある日には日本語で、別の日には英語で講義を行っています。今日、我々の学生は英語の講義を英語で受ける経験をするのみならず、時にはその専門分野も英語で教わるのが重要だと思われます。この方法で、卒業時には世界中の人々との

いっそう洗練された対話を、よりよく準備することができるでしょう。

私はこの6年間、ここ横浜国立大学で学生たち、教職員の皆様と非常に楽しく過ごして参りました。国大は、その学生が多くのお機に気づき、それらの機会を利用すれば、非常に多くのものを提供してくれます。毎年、私は次の有望な学生たちがやってくるのを心待ちにしています。私は、彼等に経済学のすばらしさに対して少しでも関心をいただいてもらい、日本の外側の世界を少しでも提示することができればと考えています。

効果的なプレゼンテーション（ホフマン講師）

2006年10月より、私は「効果的なプレゼンテーション」に関する学部の講義（英語によるアカデミックコミュニケーション）を横浜国立大学経済学部で開講しています。この講義の目的は、学術およびビジネスの世界の多様な状況において英語でより効果的なプレゼンテーションをするための幅のあるツールを学生に提供することにあります。これは今日特に重要です。なぜなら、多くの人々（ビジネスマン、エンジニア、科学者、学生、エコノミスト等々）が聴衆にいかにもメッセージを伝えるかを知らないために、プレゼンテーションにおいて多くの情報が失われているからです。これは時に異なる目標（情報提供型・説得型など）をもつ様々なテーマについての講義を通じた、様々なプレゼンテーション（短時間、学期半ば、最終）を含んでいます。このような実践を通じ、学生は効果的なプレゼンテーションをする能力を徐々に向上させ、人前で英語で話すことへの自信を得ることができるでしょう。

③ 経済学部公開授業報告

平成19年度の経済学部公開授業として、クレグ・パーソンズ准教授の「国際関係論」と井手英策准教授の「経済政策」の公開授業を行った。それぞれ日程は、以下の通りである。

①クレグ・パーソンズ准教授（「国際関係論」）：
1月16日（水）第2限（10時30分～12時00分）、

経済学部102教室

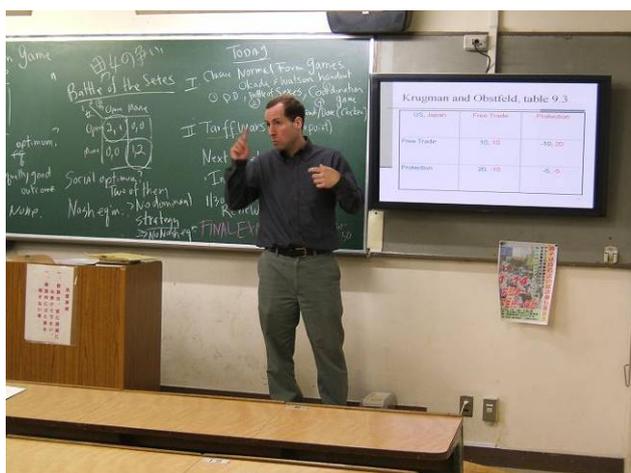
②井手英策准教授（「経済政策」）：

1月22日（火）第2限（10時30分～12時00分）、

経済学部211教室

両授業とも、学生に大変人気のある授業であり、公開授業は、とても活気のあるものであった。

◆国際関係論



1. 内容

クレグ・パーソンズ准教授は、本年度ベスト・ティーチャー賞を受賞しており、日本語と英語の両方を使った授業は、とても人気があるものである。授業の内容は、ゲームの理論を用いた貿易政策に関する授業、Game Theoretic Applications to Trade and IRであり、理論と現実の両面にわたる大変体系的なものであった。特に、ゲーム理論におけるいわゆる「囚人のジレンマ」を、2国間相互の保護主義的貿易政策のケースに適用して説明して、ある程度高度ではあるが、わかりやすい授業であった。

本授業の最大の特徴は、やはり日本語と英語を効果的に使用して授業を進めることであり、授業を受講する学生も、英語による経済学の授業に大変興味を持って参加していた。パーソンズ先生のようなネイティブ・スピーカーによる英語・日本語とを混合して使用する授業は、大変画期的なものであり、今後、横浜国立大学の授業の国際性の発展のために、このような授業を増やしていく必要がある。

2. パーソンズ先生を囲んで意見交換

参加者は、みな英語・日本語混合の授業に大変感動し、意見交換もその点に集中した。特に、次の2つの点が検討の対象となった。

第1に、授業に参加している学生のうち、英語の学力が十分に授業についていけるレベルに達している学生が、何割程度いるかという問題である。学生の英語の学力を向上させるためにも、英語・日本語混合の授業数を増し、英語によるコミュニケーション能力向上のための授業を充実させることによって、関連した授業間の連携をとっていくことが必要とされている。

第2に、授業方法の問題として、次のような問題が話し合われた。パーソンズ先生の授業における英語と日本語の混合の形式は、ある時間帯の内容は英語で、別の時間帯の内容は日本語で行うかたちで進められている。対極的な授業形式として考えられるのは、英語と日本語の逐次訳的進行である。こちらの方が、「英語」そのものの授業としては丁寧であるが、もちろん授業としては、煩雑なものとなる。英語と日本語とを混合使用する授業において、両者をどのように配置と分量で使用するか、今後の重要な検討課題といえよう。

◆経済政策

1. 内容

井手英策准教授の「経済政策」の授業は、経済学部の授業のなかでも学生に最も人気の授業である。特に、財政社会学の観点から展開される経済政策の授業として、大きな特色を持っている。

当日の講義では、日本における財政金融政策と地方財政の歴史と現状について、授業が行われた。授業は、学生に語りかける大変迫力のあるものであり、

学生がとても真剣に聞き入ってノートをとっていた。授業の形式そのものは、比較的オーソドックスなものであったが、井手先生の若さと迫力によって、学生をひきつけるとても熱気のある授業であった。まさに、授業も一つのコミュニケーションの場であ

ることを痛感した。着任間もない若い他の教員にも、ぜひこの点は参考にしてもらいたいところである。

2. 井手英策先生を囲んで意見交換



参加者は、井手英策先生の積極的な授業に大変感動していた。特に、「君たちは・・・」と言って学生へ語りかける独特の話術は、他の教員も大いに学ぶべきものであるという点で、意見が一致した。授業は、たんに知識を伝えるだけでなく、コミュニケーションの場であるという点が、再認識された。今後、授業を一層活性化させるために、特に若手教員に、授業内容の体系化や授業方法の改善に積極的に取り組むよう促していきたい。



(2) 工学部知能物理工学科のキャリア教育

工学部知能物理工学科 小野隆、佐々木賢

キャリア教育

知能物理工学科では、平成18年度にカリキュラムの大幅な改定を行い、先端物理分野における創造的精神を養うとともに、クリエイティブな技術者及び起業家の育成を目指すキャリアアップ教育を開始した。新カリキュラムでは年次進行で、○先端物理工学概説（1年前期）-平成18年度開講、○物理工学と先端技術（2年前期）-平成19年度開講、○現代社会と物理工学（3年前期）-平成20年度開講、○インベスティゲーション実習（3年前期）-平成20年開講、○プレゼンテーション実習（3年後期）-平成20年度開講、を新たに開講し、これに総合応用工学概論（4年前期：共通科目）を加え、キャリアアップ科目群とした。

この取り組みにより、平成19年度に「現代GPキャリア教育」プログラムが採択された。このプログラムの一貫として、平成19年度に、世界を舞台に活躍される4名の先生方による集中講義「物理キ

ャリアアップ」を開講した。この集中講義は本年度も開講の予定である。また、本年度から、知物キャリア教育WEBシステムが導入され、授業での使用が可能となった。

以下で、上記2つの内容を紹介する。

物理キャリアアップ

平成19年度は、以下のように集中講義が実施された。

・第1回（10月25日 A107教室）櫻井 敬三（株式会社ローム顧問） 複数の企業のエンジニア、マネージャを实践指導してきた豊富な経験から、企業における研究開発・マネジメントならびに企業人として求められる能力についての講義

・第2回（11月15日 教文ホール）小柴 昌俊（東京大学特別荣誉教授） 2002年ノーベル物理学賞受賞という輝かしい実績を生かし、素粒子物理学からニュートリノ天文学という新分野にいたる最新の成

果についての講義

・第3回(12月13日 A107教室) 武田 暁(東北大学名誉教授) 長年にわたり日本の素粒子・原子核物理学の理論的研究を先導してきた豊富な経験を生かし、脳科学と現代物理学の関係についての講義



(教文ホール) 小柴 昌俊(東京大学特別荣誉教授)
2002年ノーベル物理学賞受賞



・第4回(1月10日 A107教室) 小野 晃(独立行政法人産業技術総合研究所理事) 公的研究機関を代表する指導的立場から、学界と産業界との橋渡しをする機関の役割とそこで求められる能力などについての講義

集中講義には、165名が受講し、履修目標の(a) 物理を学べば将来どのような形で社会に貢献できるかを認識する。(b) 学術的な研究者として活躍するために必要な資質を知る。(c) 公的研究機関ではどのような成果が求められるかを知る。(d) 企業内での研究開発で業績を挙げるために必要な条件を知る。

を満たした単位取得者は162名であった。

この集中講義は本年度後期にも開講する。

キャリア教育WEBシステム

知能物理工学科では平成18年度より段階的にキャリアアップ教育科目群を整備してきている。これらのキャリア教育科目においては、学生が、教員と双方向にコミュニケーションをとることによって学習するモチベーションを高め、技術者・研究者として必要なスキルを身につけていくことがそのねらいの一つとなっている。そのためには、学生一人一人にきめの細かい指導が行える教育環境を上げることが必要となる。知能物理工学科では、平成20年度よりWEBシステムを効率的に使ったデジタルポートフォリオ教育を取り入れた。

このWEBシステム導入により、学生のレポート提出、授業内容についての質問等がWEB上で可能になった。学生がWEB上の該当する科目シートにアップロードしたファイル(回答など)を担当教員が順次閲覧しながらコメントや評価を書いていく。学生は、自分が書いたデータと教員のコメント・評価の履歴を科目シート画面上で見ることができ、最後に全ての蓄積されたデータをまとめて一つのファイル(デジタル・ポートフォリオ)として取り出せる。

現在、このキャリア教育WEBシステムを利用している授業科目は、先端物理工学概説(1年前期)、物理工学と先端技術(2年前期)、インベスティゲーション実習(3年前期)、現代社会と物理工学(3年前期)の4つのキャリアアップ科目のほか、関連教養教育科目の物理数学基礎演習Aの5科目である。その一部を紹介する。



横浜国立大学：キャリア教育WEBシステム シート一覧 08/06/23 11:2

Yokohama National University ? ヘルプ

横浜国立大学

ログイン | h19tmp13：一時テスト 基本情報変更 ログアウト

- キャリアデザイン
 - 何でも質問欄 (実習室TAが回答します)
 - 先端物理学概説
 - 物理学と先端技術
 - 現代社会と物理学
 - インベスティゲーション実習 (3年前期)
 - プレゼンテーション実習 (3年後期)
 - 物理数学基礎演習A

Copyright © Yokohama National University. All rights reserved.
〒240-8501 神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台79-1 横浜国立大学

学生と教員は別々のサイトからログインする。学生がログインすると、シート一覧画面が現れ、さらに該当する科目をクリックすると、レポート課題のシートが現れる。

横浜国立大学：キャリア教育WEBシステム 回答一覧 08/06/2

Yokohama National University ? ヘルプ

横浜国立大学

ログイン | h19tmp13：一時テスト 基本情報変更 ログアウト

研究・開発-先端材料の創出 レポート課題

この画面には <http://career.phys.ynu.ac.jp/careerweb/auth/index> から入れます。情報基盤センターのパソコン教育室 (授業時間外)、総合研究棟W棟2階情報実習室、中央図書館、理工系図書館、自名のいずれのPCからもアクセスできます。物理学と先端技術 → 研究・開発-先端材料の創出 → 研究・開発-先端材料の創出 レポート課題の順番をクリックすれば、このページが開きます。紙面では提出しないでください。6月30日までに次の課題について回答欄に入力するか、または、WORDファイルに記入してPCから添付ファイルとしてアップロードしてください。一番下の「登録」を押すと、回答が登録されます。ヘルプは?を見てください。

ナノテクノロジーを使った新製品あるいは開発中製品例 (東レ製以外) を2つ以上挙げ、その製品のどの部分にどのようにナノテクノロジーが使われているのか、それが (ナノテクノロジーを使わない場合に較べて) どんな新しい効果や機能に結びついているのかを示してください。

これをA4、1枚のWORDファイルにまとめて書いて、添付ファイルとして下のボックスからアップロードしても結構です。6月30日までに回答してください。

回答欄

学生は課題の回答を直接シートの回答欄に入力するか、あるいは、WORD ファイルに記入しPCから添付ファイルとしてアップロードする。

横浜国立大学：キャリア教育WEBシステム 回答一覧 08/06/23 11:27

Yokohama National University ? ヘルプ

横浜国立大学

ログイン | gendai：現代社会 教員 パスワードを変更する ログアウト

さんの回答

光記録技術の基礎と物理学-その応用と実情レポート課題

- 2008-05-23 14:33:28
- 2008-05-23 14:35:16 添付ファイル>> 重畳の強度を.doc
学籍番号 [] 知能物理学科3年 []
- 2008-05-23 15:18:09 マクスウェル方程式について [現代社会 教員] *80点
それなりに調べていただいたようです。電磁気にかかわる系では今後何度も出くわしますので、そのたびに実例を通じて理解深めてください。できれば演習問題を解くのが一番身につきます。ところで「I」の横分は少しおかしくないですか?調べてみてください。また回転方向の右、左は安易に言わない (面の閉じ方とかかわる) 方が無難ですね。

評点:
○100点 ○90点 ○80点 ○70点 ○60点 ○50点 ○40点 ○30点 ○20点 ○10点 ○0点

コメント

添付ファイル (ファイルを選択) ファイルが選...いません
登録

<<回答学生一覧へ戻る

Copyright © Yokohama National University. All rights reserved.
〒240-8501 神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台79-1 横浜国立大学

教員用のサイトからログインした授業科目の担当教員は、学生の回答状況を確認し、学生一人一人の回答に対してコメントを加える事ができる。その評価・コメントを学生がまた読むというふうに双方向の授業を進めていく。以上、キャリア教育WEBシステムを利用している授業の利用方法の例を示した。このシステムの導入は今年度からであり、今後、学生や教員の意見を聞きながら改善し運用していきたい。



(3) 留学生センターFD 研修会を開催

留学生センターFD委員 奥野由紀子

2月13日に大学教育総合センター渡辺雅仁教授を講師としてお招きし、「サーバーによる授業支援システムを利用した授業—「日本語上級 B (聞く話す)」での試み—」と題したFD研修会が開催された。

まず、渡辺教授から学内のオンライン授業支援システム Jenzabar についての概略説明がなされ、多肢選択問題の学習や自動採点、電子掲示板を使ったグループワーク等のデモンストレーションが行われた。参加者は実際に学生としてログインし、自動採点クイズ等を体験した。



その疑問に答える形で、今度は参加者が教員としてログインし、オンライン上での講義概要・シラバスの作成、授業配布プリントの投稿、オンラインテストの問題作成、レポート投稿方法などを実際に操作し確認した。



次にこのシステムを用いて、奥野が2007年度後期に担当した留学生センターでの授業「日本語上級 B (聞く話す)」での試みを紹介した。現代の日本を反映した生のテレビ映像やネットラジオ等のデジタルファイルを授業外でも視聴し、課題として提出する宿題、掲示板を用いた授業外討論、資料の学生によるダウンロード状況閲覧などを紹介し、授業外学修支援、学生の学修状況の把握、欠席者へのケア、紙資源の節約等に効果があったことを挙げた。また、実際の取り組みにおいて生じた疑問点や改善点を提示した。



今回の研修には、留学生センター専任教員だけでなく、非常勤講師も多く参加し、実際に無線でつないだパソコンを操作しながら、授業外での学修支援方法や、授業管理方法等について活発に議論が行われ、今後の授業方法の可能性が広がる実りの多いものとなったと言える。

実際 2008 年前期の今学期、留学生センターでは、

この授業支援システムの使用科目が増え、聴解や読解のオンライン教材や初級自習システムの開発などオンラインによる「日本語学習支援システム」の構

築が進んでいる。今後留学生の増加が見込まれる中、オンラインを利用した教育の充実が急務であろう。

(4) 英語教育部 主催 「2007 年度 英語実習科目 担当者の集い」 報告

横浜国立大学 大学教育総合センター 渡辺 雅仁

2月14日午後1時より、大学教育総合センター201室にて、「英語実習科目 担当者の集い」が開催されました。これは、英語実習科目(英語実習 1W, 1S, 1LR, 2LR, 2SW) 担当の、専任および非常勤講師の先生方を対象に、カリキュラム、学生指導、授業運営等について、忌憚なく情報を交換することを目的としたものです。当日は約20名の参加者がありました。



まず、坂田俊策英語教育部部門長より、新しい英語カリキュラムについての経緯と全般的な話があり、2006年度から始まった新しい英語カリキュラムでは、総合的な英語力を養成する英語実習科目と各学部の特性を反映した英語演習科目が、二つの柱となっているという説明がありました。引き続き渡辺が英語教育部に配備された教育機器と教員向けのオンラインサービスをご紹介いたしました。現在、201室には、各種英語テキストとともに、簡単な操作で

迅速に客観テストの採点ができる教育機器と教材作成のためのコンピューターが配備されています。また、英語教育部では、教材配信システム Jenzabarをはじめ、インターネットを介した音声や映像教材の配信など、学生の自学自習を支援するオンラインサービスも各種提供しています。

続いて行われたシンポジウムでは、英語教育部専任の田島 祐規子准教授とタラ・キャノン准教授が、それぞれ担当の英語実習科目について実践報告をしました。田島先生からは、教育目的のために加工されていない音声教材を用いた英語実習 1LR および 1W での授業例が紹介されました。田島先生は、市販のテキストに抛らず、ミステリーや映画、最新のニュースを、CD や DVD、インターネット等の情報源から入手し、本学の学生のレベルに合わせて教材化します。教材化の際には、カセットテープ・コンピュータのアナログ・デジタルの両方を活用しています。デジタルファイル化された自主教材は、Jenzabar 等で学生に配信され、授業テキスト以外に、いろいろなリスニングができるよう工夫をしています。タラ・キャノン先生からは、英語実習 1S の授業について報告が行われました。スピーキングの授業では、ともすると「自分の趣味、高校生活の思い出、わたしの家族」といった平易なトピックに流れがちです。タラ先生は「コンピュータゲームの功罪、日本は住みやすい国か」等のより具体的なトピックについて、ストップウォッチで時間を計測しつつ学生にその場で考えさせ、発表を行わせます。「十分な予習」をむしろ否定しつつ、「その場で英語で表現する」実践的

な訓練を展開します。

その後、坂田部門長より差し入れの軽食とともに、シンポジウムのパネリストとともに、日ごろの英語

実習の活動について和やかに懇談会が行われ、午後4時に閉会となりました。



第1回大学セミナーハウスFD研究会報告

日時：2008年5月10日(土)13時30分~17時00分

場所：立教大学池袋キャンパス

(太刀川記念館3階)

主催：大学セミナーハウス・立教大学

本学出席者：FD推進部門長 大矢教授、
学務部教務課大学教育係長 増田

(1) 基調講演

「FD担当者に何が求められているか？」

愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室 准教授
佐藤 浩章

講師の佐藤浩章先生は、愛媛大学の教育・学生支援機構の中でFD担当の専任として採用となり、現在6年目の先生である。今回のセミナー受講者は約60名、すべて大学セミナーハウスの会員校の教員や職員で受講者は私立大学：国立大学（8：2）の割合。国立大学は本学の他に東京学芸大、東京農工大等が出席。まずは、今回のセミナーの出席者（約60名）を4～5人ごとのグループに分けて現在の大学で実施しているFDの取組方、起きている問題点等を議論させてから講演となった。グループごとの議論では、本学と同じ問題点（どのようにF

D活動を推進すればよいのか解らない、FD研修等に全く参加しない教員の存在)を持つ大学が多い。

講演の中ではまず、「闇雲に、FDの研修会や授業参観等を行うのではなく、まずは大学の中でしっかりしたFDの定義を持つべき」という説明があった。またFDの種類として

- ・講演会やシンポジウム等の・大人数啓発型FD
- ・ワークショップ等の・少人数開発型FD
- ・授業コンサルティング等の・個人支援型FD

があり、愛媛大学での活動の様子が紹介された。愛媛大学でも初期は大人数啓発型のFDが主な活動内容であったが、大人数啓発型のFDは次第に参加人数が減り、実施することに限界を感じたところで少人数能力開発型FDに移行していったことが紹介された。少人数開発型FDはなるべく学内の教員を講師にして行っている(別表1)。

こういったFDを持続発展させていく手法についても紹介された(別表2)。

また、佐藤講師が中心となって行っている「授業コンサルティング」についての紹介があった。これは15回ある授業の中でその1回分を担当教員に変わって佐藤講師が教室に入り、担当教員の授業の進め方について、良い点、悪い点を学生に明記させて、それを集計し後日、担当教員と一緒に問題点の解決について一対一で議論する活動である。

これはこの担当教員が所属する教室の中で、いったい何が起こっていて、何が問題点であるかを明確にすることが必要で、昨期では6クラス分のコンサルティングの依頼の実績があったことが説明された。

また学生には、悪い点を書かせるのと同時にどうすれば授業が良くなるのか代替案を書かせることも必要ということであった。

本学では、このような「授業コンサルティング活動」については、それに見合う担当者が不在であるので、実施は難しいが、これも一つの授業改善の手法として今後の目標にするべき活動内容ではないかと考える。

(2) 事例報告

①「法政大学FD推進センターのFD活動取り組み状況」

法政大学学務部教学企画課FD担当事務主任
権木 健

FD活動の事例報告として、まずは法政大学の取組状況が紹介された。法政大学には「FD推進センター」という組織があり、FD活動をそれぞれ“プロジェクト”として設定し、プロジェクトメンバーには全学から兼務教員として人員をピックアップしている。

法政大学は現在、学部数が15に増え、また専任教員数も700人抱えているので、全学的なFD活動には限界を感じており。学部単位でのFD活動を目指しているが、学部によってFDの取組方に温度差があり、なかなか推進していかないことが報告された。また上記のプロジェクトのメンバーも兼務であるので、業務量の限界があり、問題化している。

また、このような兼務による組織では、任期をなるべく長くし、ある程度の権限を与えることが必要であることが説明された。

②「東京農工大学におけるFD活動取り組み状況」

東京農工大学大学教育センター長
梅田 倫弘

東京農工大では大学教育センターにてFD活動を行っているが、センター発足時から専任教員を4名採用し、12名の兼務教員とともに業務にあたっている。FDセミナーとしては「学内GP成果発表会」「TAセミナー」「新任教員研修会」「発声法、黒板の書き方講習会」等を行っており。また、授業アンケートを行い、活発な授業改善を誘発している。

愛媛大学のような授業コンサルティングも考えてはいるが、現状は実施されていない。また、本学と同様“BT(Best Teacher)賞”を設定している。選考方法はまずBT賞に関する学生投票により各学科から候補者を選出し、その中から選考会(教育実践発表会)を経て最優秀講義賞(1~2名)及び優秀講義賞(7~8名)を決定している。本学とは違い、最優秀講義賞の受賞者には百万円の教育研究費を授与している。またこのBT賞の選考はあくまで賞の選考のために学生投票を実施するものであり、授業アンケート結果とは別にしているとのことである。

最後に、それぞれの講師が壇上に上がり討論会が行われた。統一的な意見として、まずは大学の存在意義を見つめ直し、FDとは何なのか?何を目標とするのか?をしっかりと設定することが必要である

とのことであった。ただ、講習を行った・・・、シンポジウムを開催した・・・では出席者も次第に居なくなるし、得るものが何も無くなってしまふ。

FDの全体的なプログラム作りが必要であることが示された。

以上

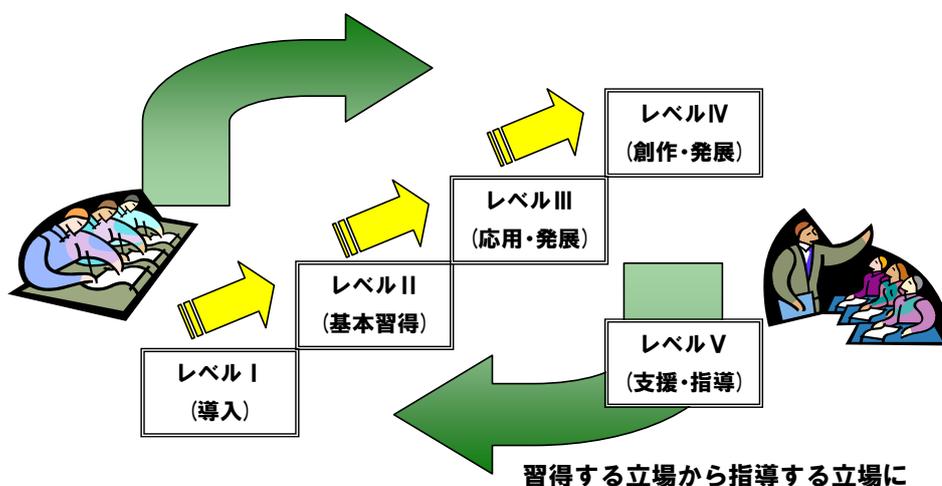
別表1

FD スキルアップ講座(2007)

	前半(13:00-15:00)	後半(15:30-17:30)
8/28(火)	視覚障害学生に対応した授業方法	研究室運営方法のコツ ～自然に先輩が後輩を指導するようになる
8/31(金)	グループ学習のコツ	レポートの書き方の教え方
9/4(火)	FD フィードバック講座	パワーポイント入門
9/7(金)	ビデオカメラ不要！ 超簡単動画教材作成法	誉め方、叱り方のコツ
9/11(火)	大人数講義法の基礎	良いシラバスの書き方 ～授業デザイン入門～
9/14(金)	Adobe Premiere を使った 動画教材作成法	Eラーニング入門
9/18(火)	動機の低い聴衆に聞かせる方法～なぜ私の話を聞いてくれないのか～	
9/21(金)	ルーブリック評価を作ろう	教員のための話し方講座

別表2

持続的発展型の能力開発



スキルアップの流れ

開催予告

FD 合宿研修会

テーマ：「スマートなFDをやりませんか」

大学教育総合センターFD推進部では、昨年に引き続きFD合宿研修会を企画しました。各部局でFD活動を進めておられるFD委員の先生方を対象とした企画を考え、学内外からFD事情に詳しい講師の先生方をお招きしております。事前に講師の先生へ日頃の疑問点を投げかけ、それに合わせて講師の先生が話題を提供するという聴衆主体型の講演も企画しています。さらにTAの教育力の向上について他大学の事例を紹介していただく企画もあります。本学の教職員であればどなたでもご参加いただけますので、奮ってご参加ください。

日時：平成20年8月25日(月) 12:00集合～26日(火) 14:00解散予定

場所：八王子セミナーハウス(八王子市柚木1978-1)

参加費：FD推進部で負担(宿泊費、交通費、食費を含む)、懇親会費は各自負担

申込先：学務部教務課大学教育係 kyomu.kyoiku@nuc.ynu.ac.jp (内線：3107)

上記アドレスへ、所属、氏名、連絡先明記の上、「FD合宿研修会参加希望」を件名としてお申込ください。

締切：平成20年7月25日(金)(先着20名程度、部局の参加者のバランスをみて決めさせていただきます)

研修会の内容(題目・講師の先生方は現在交渉中です)

プログラムⅠ「現在の学部教育に必要なもの」

荻上紘一(大学セミナーハウス)

プログラムⅡ「FD担当者に何が求められているか？」

佐藤浩章(愛媛大学)

プログラムⅢ「TAが育てば、授業が育つ」

加藤由香里(東京農工大学)

プログラムⅣ「FD活動の改革を目指して」

講師未定(横浜国立大学)

プログラムⅤ「新しいFD活動の提案」

参加者による自由討論



お 知 ら せ

山形大学教養教育FD合宿セミナー

「相互研鑽による教養教育の飛躍をめざして」

日程：20/8/4-5 または 5-6

場所：山形大学 蔵王山寮

(詳細については教務課まで)

本誌への原稿を募集しております。また、ご意見・ご感想をお寄せください。



YNU FDニュースレター No. 5

編集／横浜国立大学 大学教育総合センターFD推進部

作成担当：ニュースレター・ワーキング・グループ

事務担当：教務課大学教育係

問合せ先：kyomu.kyoiku@nuc.ynu.ac.jp

発行／平成20年7月 発行